第十一回全国大会に参加して

東京大学百年史編集室　小川千代子

昨年暮に加入したばかりの新参会員として大会に参加した。「百聞は一見に如かず」とばかり、気分は修学旅行のようなものである。

神戸の会場についたのは、七月十九日の昼近くであった。もう広い会場はほぼ満席である。事前に参加者は約一五〇名ときいてはいたが実際に会場にはいってみて、その数に驚いた。

女性の参加者は少ない。アーキビストは、女性の専門家の多い職域であると、諸外国の文献には記されているが、日本では通用しないのだろうか。いや、大会に参加しなかったアーキビストの中にはもっと多くの女性がいるのかもしれない。いずれにせよ、会場は九割方、男性で占められていた。

会場は冷房がきいていたが、暑かった。全国のアーキビストの熱意が集中していたためだろうか。ともかく皆、熱心である。それぞれ自分の実務上の問題解決の糸口を求めて大会に臨んでいるという気迫が感じられ、緊張してしまう。分科会、兵庫県公館の見学会、そして懇親会とスケジュールが進むにつれてその「感じ」は確かなものになってきた。

大会全体を通じて私自身の関心の基本は、「年史編集を基盤とした文書館設立への道程」のことであった。北海道、千葉県、兵庫県、いずれの場合も年史編集に着手した後二〇年内外の歳月をかけ、年史編集担当の中心となった歴史学者（大学の先生）や実務担当者の

たゆまぬ努力を核として、今日の文書館設立に至ったというその過程は、短時間の説明の中にも決して平坦なものではなかったことが感じられた。北海道文書館の鈴江さんや、山口県文書館の広田さんのように、文書館の設立と育成に永く心血を注いでこられた方々や、十数年前から変らぬ熱意で全史料協の運営を担ってこられた茨城の佐久間さん、桐原さん、埼玉の秋葉さん（現会長）をはじめとする方々のお話から、それは「狂気」にも似た熱意であったことが窺われた。これから文書館設立を目ざして、同じ道程をたどろうとしている自分には、あれ程の頑張りがきくのだろうかと、思わず不安がよぎるのである。

総会では文書館法制定へむけての運動が議題となっていた。諸外国に見られる文書館法に倣って、広く我が国の歴史を記す文書等に適用されるべき法律の制定を目指しているということである。ここで気になったのは、全史料協が主に各地方自治体の文書館や文書課とその職員であるアーキビストから構成されており、それ以外の史料保存利用機関からの加入は少ないことである。私なども「毛色の変った」会員に属するらしい。しかし、文書館法制定を目指すのであれば、全史料協は地方自治体というワクを超え、もっと多様な史料保存利用機関および類縁機関を包含していくべきではないだろうか。きくところによると、全史料協の類縁組織で企業史料協議会があるという。こういう組織との連絡や協力についての配慮は十分に行うべきだと思う。また、国レベルの各機関は殆ど未組織のようだし、大学関係に至っては文字通りの未組織である。国公私立を問わず、現在年史編集室を持っている大学は少くないし、そうした編集の過程で蓄積されていく史料群の行く末を危ぶむ声は高いが、残念なことにそこから大学文書館の設置を目指そうとする「発想」そのものが、欠けているのである。北海道大学などは事業終了後間もなく閉室した。こうした未組織の類縁機関に対してもっと積極的なアプローチを行ったら、全史料協自体の今後も含めて新しい展開が期待されるのではないかと感じた。

地域別懇談会で「全史料協の研究成果発表の場が会報しかないのはもったいない」といった主旨の意見があった。私も全く同感である。管見だが、米国の場合、全史料協に当るソサエティ・オヴ・アメリカン・アーキビスツ（SAA）が一九三六年に発足しているが、その二年後の一九三八年から機関誌『ジ・アメリカン・アーキビスト』の発行が始まった。現在、この雑誌は年四回発行されている。B5判100ページ少々で、文書館学に関する論文や書評が掲載され、隔月刊の会報『ニューズレター』と共に、今では世界三十数カ国に散在する三千名以上の会員の重要な情報源となり、アーキビストの専門性を高めるのに大いに役立っている。SAAは組織の中に出版部があり、機関誌や会報の他にも五〇点以上の出版物の発行、販売を行っている。これをそのまま全史料協にあてはめることは困難であるが、例えば『日本のアーキビスト』などという機関誌が発行されるようになる日が待遠しい。

最後になったが、全史料協の大会に参加してみて、今や全国各地で、特に地方自治体の文書館設立の動きが大変に活発であることがわかった。明治維新以来の「近代」日本人は、「なんと不思議なことには……自分自身の過去についてはもう何も知りたくはない」（『ベルツの日記』より）という態度をとり続け、もう一世紀以上過ぎてしまった。今になってようやく自分自身の過去について知りた

くなり始めたのである。大会でお目にかかった諸氏は例外なく公平で親切、そして熱意に溢れておられた。半世紀以上も昔、三浦周行が欧米の文書館を訪ね歩き、各文書館の館員について同じような感想を述べていたが、このように頼もしいアーキビストが全国で活躍中であるかと思うと、将来が明るく感じられる。大いに意を強くした次第である。